

<論文>

映画『おくりびと』の英語字幕における
異文化要素(日本的有標性)の翻訳方略に関する考察
A Study of Strategies for Translating Culture-Specific Items
in the English Subtitles of the film *Departures*

篠原有子
(立教大学)

Abstract

This paper examines English subtitles of the Japanese film *Departures*, focusing on strategies for translating culture-specific items (CSIs) in the film. First, it discusses various typologies of translation strategies and presents Pedersen's classifications (2011) as the framework of the present study. Next, examples of CSIs in the Japanese dialogues and their English subtitles are examined, with the translation strategies used in the subtitles identified. Based on the analysis of the nature and frequencies of the strategies, it is observed that the strategies for translating Japanese CSIs in *Departures* are both source-oriented and target-oriented. Further research is needed to see whether this mixed orientation can also be seen in English subtitles of other Japanese films, and to examine social and other factors which may influence the translator's decisions in choosing strategies.

1. はじめに

『おくりびと(Departures)』(監督 滝田洋二郎)は 2008 年米アカデミー賞外国語映画賞を受賞した日本映画である。同作品はこのほかにもモントリオール世界映画祭でグランプリを獲得するなど、日本国内のみならず海外でも高い評価を得た作品である。『おくりびと』をはじめとして海外公開を目指す日本映画は、世界各地で開催される映画祭に出品しているが、出品の際には英語字幕を付けることが求められる。これは「映画を世界的に売るには英語が必須の言語 (key language)」(Palleta, 2012)とされるため、当然のことながら『おくりびと』にも英語字幕が付けられている。

映画字幕の訳出プロセスにおいては様々な翻訳方略が用いられており、これに関する考察はいくつかある(Karamitroglou, 2000; Pedersen, 2011 など)が、日本映画に関しては英語吹き替え版についての論考(井上, 1999; 田村, 2010; 山田, 2004, 2005)があるものの、英語字幕についての検証は管見の限り行われていない。そこで本稿は日本映画に付けられた英語字幕にどのような翻訳方略が採用されているのか、どのような訳出志向があるのかを、事例研究を通して探るこ

とを目的とする。具体的にはアメリカで販売されている DVD 版『おくりびと』を分析対象として、同作品の英語字幕において、起点テキストの中の異文化要素(日本的有標性)がどのように処理されているのかについて検証を行う。異文化要素の訳出処理に着目する理由は、本稿が映画字幕を考察の対象としている点にある。映画字幕には、多くの視聴者が一読して理解できるような平易さと簡潔さが求められるため、異文化要素をどう処理するかは訳出上の問題となる場合がある。その処理方法について探ることは海外における日本文化の描出についての考察の一助となるだけでなく、字幕翻訳の実践的な教育にとっても有益である。

本稿の構成は次のとおりである。まず異文化要素とは何かについて簡単に述べたうえで、異文化要素の処理に当たって採用される翻訳方略と、その分類の多様性、および本稿で採用する分類の枠組みを示す。次に調査対象である『おくりびと』の梗概を記述し、起点テキストから抽出した異文化要素とそれに対応する英語字幕を記して、その方略を同定する。この結果を踏まえて各方略の適用状況を個別に観察したのちに、『おくりびと』の英語字幕における訳出志向について考察し、最後に今後の研究課題について述べる。

2. 異文化要素とその領域

言語はその社会の歴史や文化と深く結びついているため、翻訳者は訳出プロセスにおいて様々な問題に直面し、訳出の度に選択と決定をせまられる。起点テキストに含まれる起点文化固有の要素(異文化要素)をどう訳すかという問題もそのひとつである。ある文化に固有の言葉をペダーセン(Pedersen, 2011: 43)は「言語外文化関連記述(Extralinguistic Cultural References: ECR)」とし、「ECRは文化的言語表現¹による言及であり、言語外の存在物²やプロセスと関係するもの³」であると定義する。またこれらの言葉は「文化固有項目(Culture-Specific Items: CSI)」としても提示され、翻訳における問題の所在として視聴覚翻訳(AVT)、文芸翻訳を問わず、研究の対象となっている(Aixelá, 1996; Davies, 2003; Díaz-Cintas & Remael, 2007; Freddi & Luraghi, 2011; Katan, 2004 など)。文化の冰山モデル(Katan, 2004: 43)によれば、文化とは海面上の見える部分(technical)だけでなく、海面下の部分(formal, informal)も含む多層的なものとされる。CSIやECRは冰山モデルの中のテクニカルな部分に当たるが、これらは同モデルの海面下に位置する慣習や、内面化された価値観と切り離されて存在するわけではない。したがって、CSIやECRは目に見える文化であると同時に、目に見えない文化が反映されている可能性があり、訳出には文化の多層性についての理解が必要になるだろう。文化をどのように捉えるかについては、自文化中心主義、文化相対主義、反文化相対主義など幾つかの立場があるが、そのことと異文化要素の訳出処理がどう関連するかについての考察は稿を改めたい。

では異文化要素(ECR/CSI)とはどのような言葉を指すのだろうか。ペダーセン(Pedersen, 2011: 59-60)によれば異文化要素は12領域に分けられる。

- 1 度量衡
- 2 固有名詞(人名⁴、地名、制度上の名称、商標)
- 3 職業上の役職名(Detective Sergeant など)

- 4 料理および酒類
- 5 文学
- 6 政府 (the Foreign Office など)
- 7 娯楽 (Coney Island など)
- 8 教育 (college degrees など)
- 9 スポーツ (the pitcher mound など)
- 10 通貨
- 11 技工物 (例 double Alberti feedback loop)
- 12 その他

これらの項目は起点テキストにおける起点文化固有の要素、すなわち異文化要素(日本映画の場合は日本の有標性)がどの領域に見いだされるかを示している。しかし、ペダーセン (ibid.) が言及しているように、この 12 項目は Scandinavian Subtitles Corpus の起点テキスト中で異文化要素が含まれる領域のリストであり、項目の重複や限定性などの問題点がある。異文化要素の領域に関してはいくつかの分類があり、上記のほかに、ネデルガールド＝ラルセン (Nedergaard-Larsen, 1993) が地理、歴史、社会、文化の 4 領域、ヴァンデウェイエ (Vandeweghe, 2005) が地理、文化人類学、社会・政治の 3 領域、ラミエール (Ramière, 2004) が地理、歴史、社会・文化の 3 領域にそれぞれ分類している。本稿が調査対象とする映画は 131 分と比較的長尺であることから、起点テキストには多くの異文化要素が含まれると推測される。したがって異文化要素を抽出するには多様かつ具体的な視点からテキストを観察する必要があると考え、上述の 12 項目を異文化要素抽出の参考とする。

3. 翻訳方略とその分類法について

ここでは異文化要素の訳出にはどのような方略があるのかを概観し、本稿で採用する分類の枠組みについて述べる。

3.1 翻訳方略とは

訳出の過程で生じる問題に対処するための方法はしばしば方略 (strategies) と呼ばれるが、この用語は翻訳行為全体の様々なプロセスに関する説明にも使用されることがある。実際、現段階では翻訳方略に関する用語や区分は研究者によって異なり、「用語的な混乱状態 (terminological mess)」(Pym, 2011: 92) にある⁵。

例えばピム (ibid.) は方略を、翻訳の目的を達するための行為を系統立てる「マクロテキスト的な計画あるいは考え方 (macrotextual plans or mind-sets)」、すなわちテキスト全体を対象とした方策を指す用語として用い、翻訳の問題を解決に導く一連の行為には「手続き (procedures)」という語を当てている。逆にペダーセン (Pedersen, 2011: 69-70) は狭義の翻訳における個々の方策を「方略」とし、テキスト全体の訳出志向に関するものには「方法 (method)」という語を当てている。前者のようにマクロテキスト的な視点で「方略」という語を使用する例としては、ヴェヌティ (Venuti, 1995)

の論考がある。ヴェヌティは翻訳者が自らの仕事に取り組む姿勢や目標に対して「方略」という語を用い、「異質化 (foreignization)」と「受容化 (domestication)」という方略を提案する。これに対して、後者のように「方略」を訳出における個々の方策とする考察には、ヴィネイとダルベルネ (Vinay & Darbelnet, 1958) やアヨラ (Ayora, 1977) などがある。

一方、方略の下位分類を用いて、翻訳の諸相における対処法を説明するアプローチもある。例えば、カーンズ (Kearns, 2009: 282-285) は方略に関する概説の中で、方略を「手続きおよびテキストに関する方略 (procedural and textual strategies)」と「部分的および包括的な方略 (local and global strategies)」とに区分している。それによれば、前者は言語心理学や認知的視点から翻訳行為を説明するものであり、後者は翻訳の産物を対照に分析した結果を基に、個々の問題に対処するための方策 (省略、明示化など)、あるいはテキスト全体に関する訳出志向 (異質化、受容化など) を説明するとされる。そして「部分的および包括的な方略」のうちの部分的方略 (local strategies) が狭義の翻訳 (訳出作業) における手法を指すとされる。さらに、チェスタマン (Chesterman, 1997) は部分的方略を「理解方略 (comprehension strategies)」と「産出方略 (production strategies)」に区別している。また、ガンビエ (Gambier, 2011) は、「方略」という語は軍事用語であり、目的を達成するために取られる全体の計画や予定という意味と、それを実現する手段としての作戦や戦術、という2つの意味があるとして、翻訳においても2つの方略概念を提示する。すなわち①翻訳の出来事 (translation event) における方略 (依頼主との交渉、専門用語の探索、指定されたフォーマットでの翻訳物の納入など) と、②狭義での翻訳における方略、である。このように「方略」という用語は、訳出上の問題に対する解決法だけでなく、翻訳プロセスの様々な面を説明することがある。用語上の混乱を避けるため、また、本稿の目的に沿うために、ここではペダーセン (ibid.) にならい、方略を「訳出作業における個別の問題に対処するための方法」と定義し、翻訳の産物からその同定を試みる。チェスタマン (Chesterman, 1997: 89) によると、方略は「明示的テキスト操作の形態 (form of explicitly textual manipulation)」であり、翻訳の産物から直接観察が可能である。

3.2 翻訳方略の分類

翻訳方略に関する主な研究と、そこで採用された方略の分類を示したのが下の表である⁶。

文献	研究対象	翻訳方略
a) Gottlieb (1994)	字幕翻訳	拡大 言い換え 転移 模倣 転写 転移 凝縮 縮小 削除 放棄
b) Vinay&Darbelnet (1958) ⁷	一般的翻訳方略	借用 語義借用 直訳 転位 調整 等価 翻案
c) Aixelá (1996) ⁸	文芸翻訳における異文化要素	複写 表記の適応化 ⁹ 言語的(非文化的) 翻訳 ¹⁰ テキスト外注釈 テキスト内注釈 類義

		語 限定一般化 絶対一般化 帰化 削除 創造
d) Lomheim (1999)	字幕翻訳	省略 要約 拡大 一般化 詳述 中立化
e) Davies (2003)	『ハリー・ポッターと賢者の石』における異文化要素	保持 付加 省略 グローバル化 現地化 変形 創作
f) Díaz-Cintas & Remael (2007)	字幕の異文化要素	借用 語義翻訳または直訳 明示化 置換 転移 語彙創造 補償 省略 追加
g) Pedersen (2011)	テレビ字幕における異文化要素	保持 詳述 直接訳 一般化 置換 省略公 的等価

表 1. 翻訳方略の分類

この表は方略に関していくつもの分類があることを示している。また方略用語については用語の境界が曖昧なものや重複するもの、あるいは特定の言語間だけに該当しあまり一般的ではない用語を含む分類も提示されている。これは方略用語とその分類がまだ統一されていないとする論考(Díaz-Cintas & Remael, 2007; Pedersen, 2011; Pym, 2011 など)を裏付けるものである。例えば a) では語義借用 (calque) と直訳 (literal translation) を区別しているが、f) では「語義借用または直訳 (calque or literal translation)」としてひとつにまとめられている。また c) の「言語的(非文化的)翻訳 (linguistic (non-cultural) translation)」は「借用翻訳、逐語訳」¹¹を意味している。これらのことから、語義翻訳および直訳という方略の範囲や用語にばらつきがあるのが分かる。また c) のように「注釈」を方略に含める分類もあり、研究対象によって何を方略とするかに違いが見られる。以上のように翻訳方略に関する用語、定義、範囲にはさまざまな提案が存在するが、本稿では分析の対象(字幕翻訳における異文化要素の訳出方略)が共通している点、また、先行研究の網羅的考察を反映している点を重視して、ペダーセン(Pedersen, 2011)による分類(g)を枠組みとして使用する。

3.3 ペダーセンによるテレビ字幕における異文化要素の方略分類

ペダーセン(Pedersen, 2011: 71-100)の方略分類は、先行する多くの分類を批判的に検討し、それを統合して提案されたものである。上記の分類に至る過程においてペダーセンは、一般的翻訳方略(Vinay & Darbelnet, 1958; Chesterman, 1997)、字幕翻訳方略(Gottlieb, 1997; Tveit, 2004)、さらに文化的項目の翻訳方略(Newmark, 1988; Hermans, 1988 など)、そして最後に字幕翻訳の文化的項目の翻訳方略(Nedergaard-Larsen, 1993; Karamitroglou, 1998 など)について検討を行い、1) 一般の方略分類よりも対象と媒体の類似した方略分類が有効である、2) 重要なのは分類の詳細度である(分類は詳細すぎても簡略すぎても適切ではない)、と結論付ける。

そして、さまざまな方略分類ではカテゴリーのラベルは異なるものの、その内容は類似性が高いとして、「6つの基準(baseline)」(ibid. p.73) (Retention, Specification, Direct Translation, Generalization, Substitution, Omission)とそれに付随する下位カテゴリーを設定し、これに基づいた分類を行った。次の表は目標テキスト(TT)において起点テキスト(ST)の異文化要素が保持されている状態をレベルごとに並べたものである。項目が上にあるほど ST 保持の度合いが下がる。ペダーセン(ibid.)は ST 保持の度合いによって各方略を起点志向と目標志向に分類しているが、それによれば「保持」「詳述」「直接訳」は起点志向の方略、「一般化」「置換」「省略」は目標志向の方略、とされる。

テレビ字幕における異文化要素の方略分類	下位カテゴリー
省略(Omission): 異文化要素の削除	
置換(Substitution): 文化の置き換え	文化的置換、 状況的置換
一般化(Generalization): 一般的な語彙への言い換え	上位語、言い換え
直接訳(Direct Translation): 語義借用とシフト ¹² を含む	語義借用、シフト
詳述(Specification): ST 項目の説明	付加、完成
保持(Retention): TT における ST 要素の維持	完全化、目標言語用 に調整

表 2. ペダーセン(Pedersen, 2011)による方略分類

この表に、既存の定訳としての「公的等価(official equivalent)」¹³を加えた7種類の方略を有する分類法が提案されている。本稿における異文化要素の訳出方略の同定はこれら7種類の分類に基づいて行うこととする。

分析に入る前に、これらの方略のうち「保持」と「詳述」について説明する。この2の方略についてペダーセン(Pedersen, 2011: 77-82)は、起点言語を維持したまま起点テキストの異文化要素が保持または詳述されること、としている(起点言語は英語、目標言語はスウェーデン語とデンマーク語)。例えば起点テキストが「Cadillac Fleetwood」であれば、目標テキストでも英語のまま「Cadillac Fleetwood」と提示されることが「保持」であり、起点テキストが「Brown」(米ブラウン大学)であれば、字幕で「Brown University」と提示されるのが「詳述」とされる(ibid. [下線は筆者による])。ただし説明部分(下線部)は目標言語の場合もあるとしている。これらは方略としては可能であるが、視聴者にどの程度許容されるかは言語やその使用地域によって異なる(Davies, 2003: 73)。では日本映画に付けられる英語字幕の場合、翻訳者がこれらの方略(つまり、日本語入りの

字幕)を採用することはあるのだろうか。おそらくその可能性は極めて低いと思われる。英語字幕に日本語を入れることは、日本語になじみのない視聴者に認知的負担を与えることになるからだ。『おくりびと』の字幕を例にとりて考えてみよう。以下は仕事が決まった主人公が妻にスキヤキ用の牛肉を渡すシーンである。

(ST) こっちに越したらスキヤキ食いたって言ってたよね。

(TT) You said you wanted sukiyaki.

ここでは「スキヤキ」→「sukiyaki」という音訳 (transliteration) が行われているため「保持」とは言えない。「保持」であるためには「You said you wanted スキヤキ。」と表示されなければならないからだ。しかし、上述したように日本語入りの英語字幕が作られることは、特殊な場合を除いてほとんどないと思われる(逆に外国映画の日本語字幕がアルファベットを含むケースは珍しくない)。このことからペダーセン(2011)が定義する「保持」、あるいは起点言語を用いた「詳述」(他に Aixelá, 1996; Davies, 2003; Díaz-Cintas & Remael, 2007 などが同様の方略を異なる用語で提示している)は、主に英語を起点言語とする作品の字幕に見られる方略ではないかと思われる。

4. 対象作品(『おくりびと』)の梗概

タイトルの「おくりびと」とは、亡くなった人の「旅立ち(departure)」のために遺体を清める納棺師を指している。この作品は、主人公の大吾が様々な経験を通して納棺師として成長していく過程と、父親を送ることで親子の思い出を取り戻すまでを描いている。分析に入る前に背景知識として同作品の梗概を記す。

東京のオーケストラでチェロを弾いていた大吾は、オーケストラの解散で職を失ったことで、チェロ奏者の道をあきらめ、妻と2人で故郷の山形に帰ることを決意する。母親は2年前にこの世を去り、父親は大吾が子供の頃に家を出たまま、行方知れずであった。山形に帰った大吾は、旅行代理店と勘違いして応募した会社に採用され、死者の体を清めてあの世に送り出す納棺師の仕事始める。世間体を気にして妻には隠していたが、ある日ついに知られてしまい、妻は納得できないと言って実家に帰ってしまう。世間の目に戸惑いながらも仕事を続けるうちに、やがて大吾は納棺師としての誇りと喜びを感じるようになる。数か月後、帰宅した妻が妊娠を告げたとき、大吾の友人の母親(銭湯の主)が亡くなったという知らせが入る。初めて大吾の仕事を目の当たりにした妻は、納棺師という仕事の意味と大吾の思いを理解する。春になった頃、行方が知れなかった父親の訃報が届き、大吾と妻は亡くなった父親のもとに駆けつける。そして自らの手で父親の遺体を清める大吾の胸に、忘れていた親子の思い出がよみがえってくるのだった。

5. 異文化要素の訳出と翻訳方略の分析

『おくりびと』の字幕翻訳者であるイアン・マクドゥーガル(Ian MacDougall)は、同作品が扱った日本の葬儀の習慣を翻訳することについて次のように述べている。

お葬式の習慣も世界には山ほどあるのでそれほど違和感はありませんでしたよ。主人公が葬儀会社に入社して仕事を学んでいく過程を説明的に描いた映画でしたよね。日本人にとってもなかなか知らない世界だと思います。だからオリジナルに忠実に翻訳すればいいだけなんです。(膳所, 2011: 79)

翻訳者の訳出志向が窺えるコメントであるが、実際にどのような訳出が行われたかを探るために、以下において異文化要素とそれに対応する目標テキストを提示し、そこで採用された方略の同定を試みる。なお『おくりびと』の総字幕数は 984 枚¹⁴で、そのうち異文化要素を含む字幕は 30 枚であった。同一要素(例えば貨幣単位)が複数回抽出された場合は、タイプが同一であればその中の1つを記述し、方略名の横に全字幕内でのトークンの出現回数を記す。また、目標テキスト中の下線は、起点テキストとの対照箇所を示すために筆者が書き加えたものである。

起点テキスト	目標テキスト	翻訳方略
東京から山形の田舎に戻って もうすぐ2か月。	It's nearly two months since I moved <u>home</u> from <u>Tokyo</u> .	直接訳(2) 一般化
ご焼香させていただいて よろしいでしょうか。	May we offer <u>incense</u> ?	直接訳
多分、練炭自殺だ。	Suicide by <u>charcoal</u> .	置き換え
それではただいまより故人様の 安らかな旅立ちを願ひまして納棺の 儀、執り行わせていただきます。	<u>The rite of encoffinment</u> is to prepare the deceased for a peaceful departure.	直接訳
100万ぐらいだったらウェブ デザインの仕事で何とか返せる。	I'm working. We can pay off a million <u>yen</u> .	詳述(2)
田舎に帰る。山形の。	Go back to <u>Yamagata</u> .	直接訳
ああ、そうか。最初は 片手でどう?	Oh, how about <u>5</u> to start?	置き換え
5万円ですか?	50,000 yen?	直接訳
こっちに越したらスキヤキ 食いたって言ってたよね。	You said you wanted <u>sukiyaki</u> .	直接訳(2)
米沢牛?	Yonezawa beef?	直接訳
で、一番高いのが総ヒノキ。	And the one's <u>pure</u> <u>hinoki cypress</u> .	直接訳
ご納棺に当たり、まず最初に 含み綿と湯灌を行います。	The first step in casketing is <u>washing the body</u> .	省略 一般化

同時にあの世に帰るための <u>逆さくぐみ</u> の意があります。	And represents <u>the first bath</u> for one newborn in the next.	一般化
みなと座さんですか？	Minatoza?	省略
大ちゃん。	Daigo.	省略(3)
<u>男湯</u> で一人になったとき 泣くのよ。	But he would when he was alone in <u>that bath</u> .	一般化
なんか <u>演歌</u> っぽい。	It's like <u>an old song</u> .	置き換え
帯広。	Obihiro.	直接訳
おばあちゃんが前に <u>ルーズソックス</u> 履きたいって。	Grandma wanted to wear <u>socks like ours</u> .	一般化
<u>銭湯</u> のおばちゃん... 亡くなった。	The lady who runs <u>the bath</u> ... she's dead.	一般化
一緒に <u>銭湯</u> やってくれって 頼まれての。	...she asked me to help her heat <u>the public bath</u> .	直接訳
それで <u>由良浜漁港</u> にかけたら 教えてくれたの。	So I called <u>the fishing port</u> .	一般化
とにかく <u>戸籍</u> からはとっくに 外れてるし...	He's not our <u>family register</u> .	公的等価
ここの <u>番屋</u> を住居代わりに 使ってもらってたがや。	...that we let him live in <u>the watchman's cottage</u> .	置き換え

表 3. 『おくりびと』における異文化要素の翻訳方略

この表から同作品における異文化要素の訳出に採用された方略およびその回数は次のようになる。

直接訳:12 一般化:7 置き換え:4
省略:5 詳述:2 公的等価:1

金額に貨幣単位(円)を付加しているのは表の2か所のみで、他の字幕では起点テキストと同様に数字のみの字幕になっている。料理名は「スキヤキ」(2回)のみであるが、これは2回とも直接訳の方略が採られている。また、人名や社名に付いた接尾辞(～ちゃん(人名)、～さん(社名))は表の例も含めてすべて省略され、字幕には反映されていない。地名には「由良浜漁港」(一般化)を除いて直接訳が採用されている。

6. 分析結果と考察

ここでは分析から得られた結果に基づいて、異文化要素の訳出方略の分布と個別の方略について記述したのち、字幕の訳出志向と方略選択に関わる要因について考察する。

6.1 起点志向か目標志向か

前述のようにペダーセン(Pedersen, 2011)はそれぞれの方略を起点志向か目標志向かに分類しているが、その分類に今回の方略分析結果を当てはめると次のようになる。

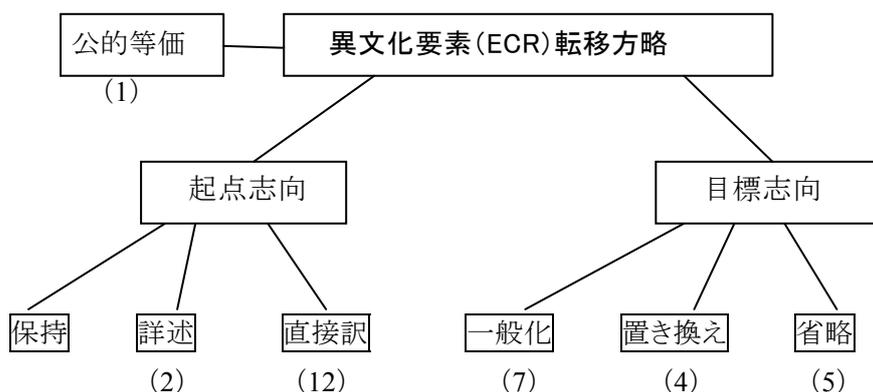


図1. 『おくりびと』における異文化要素の翻訳方略採用回数
(ペダーセン(Pedersen, 2011: 75)の図をもとに筆者が作成)

図に示されたように採用された方略とその回数は、起点志向(詳述 2、直接訳 12)が 14 回、目標志向(一般化 7、置き換え 4、省略 5)が 16 回、公的等価が 1 回、最も起点志向とされる保持は 0 であった。採用回数で言えば目標志向の方略が起点志向の方略を上回っているが、個別の方略では起点志向とされる直接訳(12)が最も多く採用されていた。次に各方略がどのような異文化要素の訳出に採用されているかを、回数の多い順に見ていく。

直接訳(12)

直接訳では「起点テキスト ECR の意味的負荷は不変である:何も足されず、何も引かれない」(Pedersen, 2011: 83)とされる。すなわち「言外の意味の転移(transfer connotations)」を生じたり、「目標言語の視聴者を導く(guide the TT audience)」(ibid.)ことをしない方略なのだ。『おくりびと』では地名(東京など)、料理名(スキヤキ)、貨幣単位(円)、植物(ヒノキ)などに直接訳の方略が採用されている。これらの言葉の音訳(transliteration)は、字幕に異質化効果(Venuti, 1995)をもたらすと思われる。また、この訳出は起点テキストに従属しているという意味において、「適切(adequate)」(Toury, 1995)な翻訳と言える。ただし、トゥーリーのこの用語は評価的な印象を与えるため、混乱を招くとする批判(Hermans, 1999)がある。「スキヤキ」に直接訳が適用されたのは、この料理が海外で比較的認知度が高いと判断されたからであろう。ほかの料理であれば異なる方略が採られたかもしれない。

一般化(7)

目標志向の訳出である一般化の方略は、「湯灌」「逆さくぐみ」「男湯」「ルーズソックス」「銭湯」¹⁵などの言葉に適用されている。これらの言葉を説明するにはある程度まとまった文字数が必要になると思われるが、詳述という方略では字幕の字数制限をオーバーしてしまう。そのため上位語を用いて一般化するという方法で文字数を削減し、字数制限のルールを順守したと考えられる。「ルーズソックス」についても「socks like ours」と一般化することで、平易な表現による言い換え(paraphrase)が行われている。

置き換え(4)

ペダーセン (Pedersen, 2011: 89-92) によれば置き換え方略は「文化的置き換え (cultural substitution)」によって「情報の等価よりも効果の等価を求める」方法、すなわち「動的等価 (dynamic equivalence)」(Nida, 1964) を求める「コミュニケーション重視の翻訳 (communicative translation)」(Newmark, 1981) とされる。また、ペダーセン (Pedersen, 2011: 91-96) は置き換え方略の下位カテゴリーとして、「文化的置き換え (cultural substitution)」と「状況的置き換え (situational substitution)」を設定している。「状況的置き換え」とは、語彙よりも状況を重視して、異文化要素を起点テキストと無関係なものに置き換える方略を指す。

次に置き換え方略に分類された英語字幕を見ると、抽出された異文化要素とその対応訳は①練炭→charcoal、②片手→5、③演歌→an old song、④番屋→the watchman's cottage である。このうち③は状況的置き換えに類似しているが、目標テキストには起点テキストの「歌」という要素が含まれており状況的置き換えには当てはまらない。したがって、いずれの字幕も文化的置き換えと言える。また、③は一般化に類似しているが、「演歌」は「現代歌謡の一種」(『広辞苑』第六版) であり、「an old song (古い歌)」という字幕は「歌」の要素を含むものの、「演歌」を上位語で言い換えたとは言えない。したがって一般化の範疇には属さないと考えられる。状況的置き換えの典型例としては、ジョークなどをそのまま訳出しても面白さが伝わらないとき、視聴者を笑わせるために起点テキストと無関係な字幕にするケースである。この方略が有効なのは、「字幕において最も重要なことは起点文化の視聴者に与えたものと類似した感情を、目標文化の視聴者にも引き起こすこと」(Díaz-Cintas & Remael, 2007: 216 [下線は筆者による]) とされるためである。

省略(5)

省略は目標テキストに異質な要素を入れない最も目標志向の方略である。本作品の異文化要素についてはこの方略が 5 回採用されている。そのうち 4 回が親しみや敬意を表わす接尾辞(～ちゃん、～さん)で 1 回が「含み綿」である。アニメなどの映像作品に作品愛好家が独自に字幕を付けるファンサブ (fansubs) という字幕形態では、接尾辞は「～san」「～kun」「～sensei」などと直接訳で提示される場合がある (Díaz-Cintas & Muñoz-Sánchez, 2006) が、『おくりびと』の字幕では省略されている。「含み綿」が省略されたのは、当該字幕における字数制限と、次のシーンで「含み綿」の実演があるため、後続の字幕で提示することを選択したものと考えられる。

詳述(2)

詳述とは、翻訳されない形で提示された異文化要素に情報を付け加える方略で、完成(completion)あるいは付加(addition)という手法を通して行われる(Pedersen, 2011: 79-82)。本稿において筆者は100万→million yenという訳出を詳述方略に分類したが、起点テキストには含意としての異文化要素(円)はあるもののテキストには明示されていない。したがって100万→million yenは、付加による詳述という方略を用いて、起点テキストの含意を明示したものと言えるだろう。ペダーセン(ibid.)の提案する詳述は下位カテゴリーに明示化を含まないが、詳述によって起点テキストの持つ曖昧さが除去され、その結果、明示的な目標テキストになるとしている。

公的等価(1)

『おくりびと』の中で公的等価の方略で訳出されたのは戸籍→family registerであった。公的等価は「既成の解決法(ready-made solution)」(Pedersen, 2011: 97)で、度量衡換算もこれに含まれるが、『おくりびと』では度量衡換算に関する台詞はなかった。

6.2 考察

以上の分析結果をもとに、『おくりびと』における異文化要素の翻訳方略について考察する。まず各方略の採用について、目標志向の方略(一般化、置き換え、省略)の採用回数(16)が起点志向の方略(保持、詳述、直接訳)の採用回数(14)を上回るという結果が得られた。このことから、同作品の字幕は目標志向であると推測できる。その一方で、目標志向と起点志向の方略採用回数の差は顕著とは言えず、また、最も多く採用された方略は起点志向とされる直接訳(12)であった。これらの結果から『おくりびと』の異文化要素は起点志向と目標志向のどちらにも偏らない訳出になっていることが示され、字幕の制約やコンテキストに応じて異なる志向の方略が使いつけられていることが観察された。「読者を作者に近づけるのか、作者を読者に近づけるのか」(Schleiermacher, 1813)という翻訳者の選択は固定的ではないことが分かる。また翻訳者は「オリジナルに忠実に」とコメントしているが、異文化要素を常に異質なままで提示しているわけではなく、目標文化に受容されやすいように省略や置き換えなどを行っていることも確認された。字幕翻訳は目標志向が強く、受容化翻訳が行われているとする論考(Nornes, 1999, 2007)や、英語圏では受容化翻訳が支配的だとするヴェヌティ(Venuti, 1995)の議論が必ずしも当てはまらない事例と言える。

では方略に関するこれらの結果から何を読み取ることができるだろうか。「方略は翻訳者が規範に従うための方策」(Chesterman, 1997: 88)であり、いつどのような方略が使われているかという傾向は、そのデータに含まれる規範を示している(Pedersen, 2011)。したがって、今回の分析で『おくりびと』の異文化要素の訳出が起点志向と目標志向のほぼ中間に位置するという結果が出たことは、それが英語字幕における訳出の規範である可能性を示唆すると言えるだろう。翻訳者のコメントは異質化翻訳を想起させるが、方略分析の結果からは起点志向、目標志向のどちらにも偏らない翻訳が観察される。しかし、現段階ではまだこれが日本映画における英語字幕の規範とは言えない。方略分析は規範を探る方策の一つではあるが、現段階では分析のサンプル数が十分

ではないこと、翻訳が行われている環境や他の参与者との関係性など、翻訳行為を左右するとされる社会文化的要因についての検証が行われていないからである。それを明らかにするためには、他の作品の英語字幕についても調査を行い、さらに多くのデータを見ると共に、方略分析に加えて、方略選択を左右するとされる要因も考察の対象に含める必要があるだろう。

7. まとめと今後の課題

本稿では『おくりびと』の中の異文化要素がどのような翻訳方略を用いて訳出されているかについて検証した。方法論としてはペダーセン (Pedersen, 2011) の方略分類に基づいて字幕の方略を同定し、各方略の採用回数を調べるという手法を採った。その結果、同作品では異文化要素の翻訳志向は起点志向と目標志向のほぼ中間にあると認められた。

一方で、方略選択を左右するかもしれない翻訳者以外の要因についても、検証する必要がある。字幕翻訳には翻訳者以外の参与者も関与している (Díaz-Cintas & Remael, 2007; Fawcett, 1995; 篠原, 2011 など) ことから、ほとんどの字幕に複数の参与者の意図が反映されていると考えられる。そのため翻訳にどのような方略が採用されているかを見るにあたっては、テキストタイプや機能に言及するだけでは不十分であり、翻訳における「人的要素 (human element)」を考慮しなければならない (Fawcett, 1995: 179)。また翻訳のあらゆる行為とプロセスにはパワープレーの要素が含まれており、検閲や編集という形で翻訳者の訳出行為に影響を与えるとされる (ibid. p. 190)。翻訳行為を支配する要因としてルフェーヴル (Lefevere, 1992: 11-25) は「専門家 (批評家、校閲者、教師、翻訳者)」や「支援 (個人および出版社やテレビ局などのメディア)」を挙げ、中でも支援を構成する要素であるイデオロギー¹⁶が「翻訳者の採用する基本的な方略を決定づける」 (ibid. p. 41) とする。例えば『おくりびと』の DVD 版には特典映像として滝田洋二郎監督のインタビューが入っているが、その中で同監督は「これは重い映画ではない」と語り、「死」というテーマを通して「生」を考えることを目指したと述べている。予告編にはコミカルなシーンが使われ、難しいテーマを扱った作品にもかかわらず軽いタッチの内容になっている。また、同作品はアメリカ映画協会 (MPAA) の審査で PG-13¹⁷ に指定されているが、各国のレーティング・システム (rating system)¹⁸ の審査基準が映画の編集内容を左右する可能性も考えられる。これらのパラテキストが「支援」を構成する要素となって、翻訳の方略選択に影響を与えるとするのがルフェーヴルの主張である。加えて経済的要素 (翻訳料) やステータス要素 (翻訳料への見返りとして支援者の期待に応えることなど) も翻訳行為を左右する要因とされる (ibid. p. 16)。

ペダーセンの方略分類については、分析の過程でいくつかの課題が明らかになった。まず「保持」が適用可能な言語ペアは限定的だという点である。「保持」は、起点テキストを目標テキストにそのまま提示する方略であるが、日本映画の英語字幕では、視聴者の認知的負担などから採用することは困難と思われる。それは今回の対象作品でこの方略が一度も採られていないことから推測できる。第 2 の課題としては、各方略の境界が明確でない点が挙げられる。分析の際に、異文化要素のどの部分に焦点を当てるかによって分類が異なるケース (一般化と置き換えの「ルーズソックス」、詳述の「100 万」についての記述を参照されたい) があり、そのため方略の同定に迷う場面がいくつかあった。分析の客観性を保つためには、より簡明な分類が望ましいだろう。以上の

ことを認識した上で、今後はペダーセンの方略分類を批判的に運用する必要があると考える。

今後は方略分類の批判的運用と、より適切な分類法の構築を研究課題とし、方略選択を左右すると思われる要因(メディア、マーケティング、制作側の意図、プロモーション、翻訳環境の変化など)について研究を進めたい。

.....

【著者紹介】

篠原有子(SHINOHARA Yuko) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程在籍。フリーランス字幕翻訳者。専門分野は通訳翻訳学および字幕翻訳研究。

.....

【註】

- 1 地名なども含む。
- 2 架空のものも含む。
- 3 以降、訳はすべて拙訳による。
- 4 すべての人名が異文化要素ではないという指摘(Davies, 2003: 71)もある。
- 5 方略に関する用語の混乱については Chesterman(1997)、Martín(2000)などでも言及されている。
- 6 これらの他にもオペラの字幕(surtitles)の方略に関する研究(Freddi & Luraghi, 2011)などがある。
- 7 訳語は『翻訳学入門』(Munday, 2008)を参照。
- 8 訳語は藤濤(2007)を参照。
- 9 orthographic adaptation
- 10 linguistic (non-cultural) translation
- 11 藤濤(2007: 53)を参照。
- 12 Catford(1965)の分析したシフトは(a)構造的シフト、(b)クラスのシフト、(c)ユニットあるいはランクのシフト、(d)体系内シフト、の4種類であるが、Pedersen(2011)が取り上げているのは構造的シフトについてのみである。
- 13 Pedersen(2011)は例として、度量衡換算についての政府の決定(デンマークにおけるメートル法の採用)や、ディズニー社の指示によってスウェーデンにおいて「Donald Duck」が「Kalle Anka」と訳されているケースを挙げている。
- 14 [Mika screams][Orchestra plays]など、ト書きの字幕は除く。
- 15 「bath」と「public bath」の2通りの字幕があるのは、コンテキストによって使い分けているためと思われる。
- 16 政治的なものに限定されず、「私たちの行動を規制する形式、慣習、信条が絡み合ったもの」(Lefevere, 1992, p. 16)とされる。
- 17 年齢制限ではなく、13歳以上には適しているという判断である。『もののけ姫』や『ハリー・ポッター』シリーズの一部もPG-13である。
- 18 レーティング・システムと映画製作の関係についてはマクリントック(McClintock, 2009)を参照。

【参考文献】

- Aixelá, J. F. (1996). Culture specific items in translation. In R. Alvarez & M. Carmen-Africa Vidal (Eds.), *Translation, power, subversion* (pp. 52-78). Clevedon: Multilingual Matters.
- Chesterman, A. (1997). *Memes of translation: The spread of ideas in translation theory*. Amsterdam: John Benjamins.
- Davies, E. E. (2003). A goblin or a dirty nose? The treatment of culture-specific references in translations of the Harry Potter books. *The Translator*, 9 (1): 65-100.
- Díaz-Cintas, J. & Muñz-Sánchez, P. (2006). Fansubs: Audiovisual translation in an amateur environment. *The journal of specialised translation*. [Online]
http://www.jostrans.org/issue06/art_diaz_munoz.pdf (2012年12月17日)
- Díaz-Cintas, J. & Remael, A. (2007). *Audiovisual translation: Subtitling*. Manchester & Kinderhook: St. Jerome.
- Fawcett, P. (1995). Translation and power play. *The translator*, 1(2): 177-192.
- Freddi, M. & Luraghi, S. (2011). Titling for the opera house: A test case for universals of translation? In L. I. McLoughlin, M. Biscio & M. Á. N. Mhainnín (Eds.), *Audiovisual translation subtitles and subtitling* (pp. 55-85). Oxford & New York: Peter Lang.
- Gambier, Y. (2011). Translation strategies and tactics. *Handbook of translation studies 2011*. John Benjamins.
- Gottlieb, H. (1994). Subtitling: diagonal translation. *Perspective: Studies in translatology* 2 (1): 101-121.
- Karamitroglou, F. (2000). *Towards a methodology for the investigation of norms in audiovisual translation*. Amsterdam: Rodopi.
- Katan, D. (2004). *Translating cultures: An introduction for translators, interpreters and mediators*. Manchester, UK & Northampton: St. Jerome.
- Lefevere, A. (1992). *Translation, rewriting, and the manipulation of literary frame*. London & New York: Routledge.
- Lomheim, S. (1999). The writing on the screen. Subtitling: A case study from Norwegian broadcasting (NRK), Oslo. In G. M. Anderman (Ed.), *Word, text, translation*, (pp. 190-208). Great Britain: Multilingual Matters.
- Martín, R. M. (2000). Translation strategies: Somewhere over the rainbow. In A. Beeby, D. Ensinger & M. Presas (Eds.), *Investigating translation*, (pp. 129-140). Amsterdam: John Benjamins.
- McClintock, P. (2009, July 6). ‘Harry Potter’ returns to PG territory. [Online]
<http://www.variety.com/article/VR1118005716/> (2012年12月20日)
- Nedergaard-Larsen, B. (1993). Culture-bound problems in subtitling. *Perspectives: studies in translatology* 2: 207-242.
- Newmark, P. (1981). *Approaches to translation*. Oxford & New York: Pergamon.

- Nida, E. A. (1964). *Toward a science of translating*. Leiden: E. J. Brill.
- Nornes, A. M. (2004[1999]). For an abusive subtitling. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader* (2nd ed.) (pp. 447-469). London & New York: Routledge.
- Nornes, A. M. (2007). *Cinema babel: Translating global cinema*. Minneapolis: University of Minnesota Press.
- Palleta, A. (2012, October. 3). Lost in translation, found in subtitles. [Online]
<http://online.wsj.com/article/SB10000872396390444592404578033301429532328.html> (2012 年 11 月 5 日)
- Pedersen, J. (2011). *Subtitling norms for television*. Amsterdam & Philadelphia: John Benjamins.
- Pym, A. (2011). Translation research terms: A tentative glossary for moments of perplexity and dispute. In A. Pym (Ed.) *Translation research projects 3*, (pp. 75-110). Tarragona: Intercultural studies group. [Online]
http://isg.urv.es/publicity/isg/publications/trp_3_2011/pym.pdf (2012 年 12 月 14 日)
- Ramiere, N. (2004). Comment le sous-titrage et le doublage peuvent modifier la perception d'un film. Analyse contrastive des versions sous-titré et double en français de film d'Elia Kazan, *A streetcar named desire* (1951). *Meta* 49 (1): 102-114.
- Schleiermacher, F. (2004[1813]). On the different methods of translating. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader* (2nd ed.) (pp. 43-63). London & New York: Routledge.
- Toury, G. (2004[1995]). The nature and role of norms in translation. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader* (2nd ed.) (pp. 205-218). London & New York: Routledge.
- Vandeweghe, W. (2005). *Duoteksten. Inleiding tot vertaling en vertaalstudie*. Gent: Academia Press.
- Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility: A history of translation*. London & New York: Routledge.
- Vinay, J. P. & Darbelnet, J. (2004[1958]). A methodology for translation. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader* (2nd ed.) (pp. 128-137). London & New York: Routledge.
- 藤濤文子(2007)『翻訳行為と異文化コミュニケーションー機能主義的翻訳理論の諸相』松籟社。
- 井上逸兵(1999)「井上逸兵のしましまにしましま！(2)トロとTOTOROに見る日本とアメリカ サツキとメイはアメリカ人？」『NEWTTYPE 1999 年 2 月号』[Online]
<http://homepage3.nifty.com/ipinoue/shimashima9902.htm> (2012 年 12 月 15 日)
- マンデイ, J. (2009) 『翻訳学入門』(鳥飼玖美子・監訳) みすず書房. [原著: Munday, J. (2008). *Introducing translation studies*. New York: Routledge].
- 新村出(編)(2008)『広辞苑』(第 6 版)岩波書店。
- 篠原有子(2011)『映画字幕における翻訳行為』立教大学大学院修士論文[未刊行]
- 田村千尋(2010)「日本のアニメーション映画の英語吹き替え版におけるセリフの付け加え」『翻訳研究への招待』第 4 号:87-105. [Online] <http://honyakukenkkyu.sakura.ne.jp/archive.html> (2012 年 12 月 15 日)

山田健太郎(2004)「英語版アニメ作品に見る翻訳の問題:『千と千尋の神隠し』の場合」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第5号:195-205.

山田健太郎(2005)「英語版アニメ作品に見る翻訳の問題2:『となりのトトロ』の場合」『県立長崎シーボルト大学国際情報学部紀要』第6号:273-284.

膳所美紀(映画翻訳家協会・編)(2011)『字幕翻訳者が選ぶオールタイム外国映画ベストテン』AC Books.

【作品目録】

『おくりびと(Departures)』(英語字幕版)(2008) 製作販売・E1 Entertainment U.S.

